

特集

〈事例〉

楽しみながら行う花栽培が 健康づくりにもつながる

公益社団法人
東海村シルバー人材センター

(茨城県)

東海村SCでは、独自事業として花栽培を平成7年3月から手掛けている。公共機関や企業などから依頼を受け、5種類の花を栽培。苗は近隣の園芸農家から購入するものの、3棟あるビニールハウスで水まき、施肥、枯れ葉摘みなどの作業を会員18人がローテーションで行っている。地域のイベントなどで会員が直接販売することもあり、住民からも好評を得ている。

センターの概況と特色

東海村は、茨城県の中部にある人口約三万七千八百人の村。日本における「原子力研究開発発祥の地」としても知られており、原子力関連の国の機関で働く村民も多い。一方、米やメロン、ブドウなどを栽培する農地が広がる自然豊かな土地柄でもある。

東海村SCは、昭和五十九年に小規模センターとして設立。平成六年に法人化し、平成二十五年に公益社団法人に移行した。

同センターでは、会員の高齢化とともに、企業の定年延長などの影響で会員数は減少傾向にある。

しかし、そのような中でも、し

め繩飾りや手芸、刃物研ぎなどの独自事業は、熟練の技術力で住民からの信頼が厚い。

特に、歴史が長い花栽培事業は地域に定着している。

梶健一事務局次長は「平成七年三月に独自事業として開始した花栽培は、当センターの女性会員獲得のための『売り』ともいえる存在です」と話す。

村花の栽培をきっかけに 五種類を展開する事業へ

現在、花栽培事業では春・秋に栽培を行い、計五種類の花を育てている。

〈春：四月中旬～六月上旬〉

● マリーゴールド（三色／オレンジ）



梶健一事務局次長（写真左）と、入会時から花栽培を手掛けてきた理事の高畑則子さん

ジ、イエロー、レッド）

● ベゴニア（三色／ホワイト、ピンク、レッド）

● ペチュニア（三色／ホワイト、レッド、ブルー）



園芸農家から発芽した稚苗がビニールハウスに届くと、就業会員全員で三寸ポットに移植する(写真上)。開花までには、水まき、施肥、液肥(写真下)作業などを行う



②育苗
近隣の園芸農家に、予約注文数に少し上乗せした数の育苗を依頼する。育苗は、センターや会員などの作業ではうまくいかなかったことから、この形に落ち着いた。プロの手を借りることで、持続可能な事業となっている。

①納入先からの受注
現在、保育所や幼稚園、コミュニティセンターなどの公共機関、商工会、民間企業、法人団体など十八か所から栽培の依頼を受けている。

花栽培事業は、センター事務所から車で二分の総合福祉センター敷地内にあるビニールハウス三棟(各七五㎡)で作業を行っている。作業手順は以下の通り。
①納入先からの受注
現在、保育所や幼稚園、コミュニティセンターなどの公共機関、商工会、民間企業、法人団体など十八か所から栽培の依頼を受けている。

花栽培事業の流れ

やすいマリーゴールドなどを植えることとなった。さらに、女性会員の就業意欲が高いこともあって、事業が軌道に乗ったという。

〔秋：九月上旬～十二月上旬〕
●パンジー(六色)／ホワイト、ピンク、レッド、イエロー、パープル、ラベンダー)
●ピオラ(四色)／ホワイト、レッド、イエロー、パープル)
花栽培事業のきっかけは、村花「スカシユリ」の球根栽培を村から依頼されたこと。加えて、平成九年に「全国〴〵みどりの愛護のつどい」が隣接するひたちなか市の国営ひたち海浜公園で行われたことも後押しとなった。その後、管理の難しさからスカシユリの栽培は断念したが、センター近くに設置したビニールハウスの有効活用を進める観点から、花栽培を事業化。比較的栽培がし

③ 稚苗をポットに移植

園芸農家から発芽した稚苗がビニールハウスに届くと、全就業会員で三寸ポットに移植。稚苗を傷つけないように細心の注意を払い、今後の管理の方針を確認する。

④ 開花までの管理

ポットへの移植後は、施肥、ポットの間隔空け、消毒、花殻・枯れ葉摘み、液肥などの作業を行う。水まき作業は、朝夕の一日二回。会員が二人一組となり、ビニールハウスの開閉を含め、ローテーションで責任を持って作業に当たる。

⑤ 出荷

事務局担当職員の指示の下、就業会員総出でポットを仕分けして軽トラックに積み込み、依頼先まで出荷する。出荷先の依頼があれば、花壇などへの植え込みも行う。

栽培から開花まで管理 愛着の湧いた花の販売も担う

令和三年度の花栽培事業の事業実績は、就業会員が十八人（男性



力の要る出荷作業は、男性会員が担う（写真上）。現在、18か所に出荷している。イベントに出店し、会員が販売することもある（写真下）



六人、女性十二人、就業延人員は三百七十四人日、契約金額は約六十三万円となっている。

センター入会時から花栽培を手掛けてきた理事の高畑則子さんは、「この就業の一番の魅力は、ビニールハウスで開花まで管理をする

ことです。作業は七五㎡のハウス三つ分になるのでかなり労力を要しますが、体を動かせるので気持ち良く、みんなと一緒に楽しんでやっています」と語る。

平成二十三年から就業しているが、花栽培事業をやめたいという

会員の姿は記憶にないと話す高畑さん。季節ごとに就業のペースが決まっていて、朝夕の作業が多いので自由度も高い。ですから、花栽培は、就業意欲を保ちやすいのだと思います」。

また、活動の中での楽しみも多



花栽培事業で活躍する就業会員（写真上）。出荷先の依頼があれば、花壇の植え込み作業も会員たちが担っている（写真右）

く、例えば、休憩時間にはお茶やお菓子をシェアし、和気あいあいと交流しているとのこと。こういった仲間とのつながりも、就業意欲につながるのだろう。

無事に栽培が終わると、村のイベントやビニールハウス、センタ

「事務所前などで育てた花を販売する機会もあり、これも大きなやりがいとなっているようだ。」

「販売の際は、開始前から列を作って待っているお客さまもいます。私自身も友人から注文を頼まれ、いくつも購入するのですが、

順調な運営を続ける花栽培事業だが、会員の高齢化に伴い、力仕事を担う男性会員の確保が喫緊の課題だ。

高畑さんは「土作りや出荷の際の運搬には、どうしても力が必要です。また、現在のメンバーの平均年齢は七十五歳を超えているので、今後、運転などにも制限が出てくるかもしれません。若い会員の募集が、急務となっています」と語る。

事務局としても、今後、就業会員の獲得に力を入れる方針だ。

梶事務局次長は「花栽培はほかの事業と比べると、配分金があまり高くはありません。ですから、通年で就業するのは厳しいかもし

愛着が湧いた花を喜んでもらったり、親しい人の庭で咲くことを考えると、それも喜びの一つです」と高畑さんは語る。

力仕事を担う男性会員の確保が今後の課題

事業運営状況 (平成28年度～令和2年度)

年度	会員数			粗入会率	就業実人員 (延人員)	就業率	受注件数	契約金額	公民比
	男	女	計						
平成28	226	131	357	3.2	323 (43,277)	90.5	3,224	177,370	56.9/43.1
29	225	125	350	3.1	306 (40,983)	87.4	3,207	165,842	58.4/41.6
30	215	119	334	3.0	329 (37,225)	98.5	2,492	145,956	63.2/36.8
令和元	204	107	311	2.7	319 (36,791)	100.0	2,392	144,036	64.2/35.8
2	192	96	288	2.5	265 (33,922)	92.0	2,278	142,336	62.0/38.0

※受注件数、就業実人員、契約金額は請負・委任と労働者派遣事業を合計した数値
 ※就業実人員は平成29年度まで請負・委任、平成30年度以降は請負・委任と労働者派遣事業が対象
 ※就業実人員は令和2年度から労働者派遣事業の教育訓練受講を含む

れませんが、会員が高齢になっても、健康づくりとして無理なくできる就業という位置付けで、ニーズはあると思っています。今後も、積極的に声掛けを続けていきたいです」と決意を語った。

(山辺健史)